

障がい者スポーツのコーチング学的研究

—指導者へのインタビューから—

The Study of Coaching relating to the instruction of disabled players in sports

—through the interview with coaches—

金子元彦 森川 洋* 吹田 真士**

KANEKO Motohiko, MORIKAWA Hiroshi, SUITA Masashi

要旨

本研究ではコーチング学的視点から障がい者スポーツについて検討するために、指導者へのインタビューを実施した。具体的には、障がい者へのスポーツ指導と健常者へのスポーツ指導の共通点や相違点について検討した。主に①障がい者へのスポーツ指導と健常者へのスポーツ指導の共通点や相違点の量的検討、②CoteとGilbert⁶⁾の「コーチに必要な知識」をもとに、障がい者スポーツ指導の特性について検討を行い、③インタビューから得られた実践面への示唆を加えた。

1. 障がい者へのスポーツ指導と健常者へのスポーツ指導の共通点と相違点の量的検討では、相違点のほうが共通点よりも多かった。アダプテッド・スポーツの元々の考え方に従えば、この結果はある程度妥当なものとする解釈が成り立つ。一方、人間の特性を考えると、障がい者スポーツに関わる指導者は無意識のうちに指導対象者の「できないこと」やいわゆる健常者との「違い」に強く影響を受けている可能性があることが示唆された。
2. 多様な障がい者に対して指導している指導者の場合、全体として「対他者の知識」に関する意識や関心が非常に高く、「専門的知識」についてはスポーツに関する専門的知識よりも障がいおよび障がい者に関する専門的知識への意識や関心が高かった。それに対し、バドミントンに特化して障がい者への指導に携わってきた指導者の場合、特化したスポーツ種目の「専門的知識」に対する意識や関心が高く、それに伴った「対自己の知識」についての意識や関心が高まっている様相が確認できた。

キーワード：コーチング学 コーチに必要な知識 一般理論

* 帝京平成大学

** 筑波大学

I. 問題の所在と研究の目的

今日、日本における人々のスポーツに対する取り組みについては、子どもから高齢者、障がい者まで幅広い層の人々が参加し、健康や日常の楽しみを目的としたものから高度な競技的な取り組みによるものまで志向も多岐に渡る。また各々のスポーツ活動も指導者がついているケースもあれば、そうではないケースもあり、それぞれのケースにより多様な形態が存在するものと思われる。

障がい者スポーツの指導者には、自身が障がいを有し、障がい者スポーツの競技者として活動した経験を持つ者から、いわゆる健常の指導者までさまざまである。健常の指導者が障がい者スポーツの競技経験を持たないことは言うまでもないが、障がい者スポーツの指導者に特化して指導している指導者、健常者への指導経験を経て障がい者への指導に携わっている指導者あるいは健常者および障がい者への指導を兼ねている指導者など、そのスタイルもさまざまだろう。これらのうち健常者への指導経験があり、かつ障がい者への指導に携わっている者や、健常者および障がい者への指導を兼ねている者の場合、健常者への指導経験を活かしながら障がい者への指導試行錯誤しているケースが多いものと予測される。しかし、先行研究等では障がい者を対象としたスポーツ指導において、健常者への指導経験が障がい者へのスポーツ指導にどのような活かされているかという検討報告はほとんど見当たらない。

例えば、障がい者スポーツを含むアダプテッドなスポーツについて、矢部らが『アダプテッド・スポーツ科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』¹⁾を上梓し、多角的な知見を纏めている。しかし、ここにコーチング学的視点からの論考はほとんど含まれていない。このことは、日本の障がい者スポーツが長らく医療福祉の一領域と位置づけられ発展してきたことが背景のひとつと考えられる。またコーチング学領域においても障がい者への指導と健常者への指導の関連性に関する記述は乏しい。そのような中、金子^{2) 3) 4)}は、障がい者と健常者への指導上の類似点や共通点について言及している。具体的にはより合理的な動きを追求する運動の経済性を意識した指導を心掛ける点や対象者の動きを指導者自身が想像しようとする点を類似点として挙げつつその程度には相違点もあることを述べている。また海外では、たとえばレイナー・マートン⁵⁾が「コーチは、障害のある選手に対応する方法を含めて、自分の競技を理解しなければならない」と障がい者への指導と健常者への指導の関連性について総論的に触れている。

本研究では、障がい者と健常者へのスポーツ指導の共通点や相違点を通じ、コーチング学的視点から障がい者スポーツについて検討することを目的とする。

II. 研究方法

本研究の調査対象者は障がい者への指導経験を有する者4名である。調査は障がい者と健常者へのスポーツ指導上の共通点や相違点について聞き取りを行い、その結果について検討を行った。調査方法および内容は次の2つである（以下、調査1および調査2とする）。

なお、本研究は東洋大学ライフデザイン学部研究等倫理委員会の承認を得て実施した。

【調査1】

対象は地域で活動する障がい者スポーツ指導者2名（指導者A:指導歴約7年、20代男性。指導者B:指導歴約5年、20代女性、5年の指導歴のうち、後半2年は高齢者への運動指導も多く含む。両者とも大学で健康・スポーツに関する領域を専攻）である。指導者A、Bともに約1時間×2回の聞き取り調査を実施した。

調査内容は、「健常者への指導と障がい者への指導の共通点と相違点を示してください」と提示し、付箋を用いて回答を得るとともに、発言についてはICレコーダーを用いて記録し得られた回答内容について研究者が検討し、分類および考察を行った。

【調査2】

対象は大学生バドミントン選手の指導者、かつ障がい者バドミンントンの指導およびサポート経験を有する2名（指導者C：指導歴約7年、20代男性。指導者D:指導歴約3年、20代女性。指導者C、Dとも大学で健康・スポーツに関する領域を専攻）である。それぞれ約1時間×1回の聞き取り調査を実施した。なお両者とも障がい者バドミンントンの指導およびサポートの経験を有するが、競技者に対する指導、サポートがほとんどであったことから、身体障がい者のみを想定して聞き取りを進めた。

調査内容は、「身体障がい者への指導時に、大学生を指導する時とは違うと感じること」および「身体障がい者への指導時に、大学生を指導する時と共通していると感じること」であった。回答内容についてはすべてICレコーダーで録音をした。

その後、得られた回答内容について研究者が検討し、分類および考察を行った。

Ⅲ. 結果

以下に調査1および調査2の結果を示した。

Ⅲ-1. 調査1（地域で活動する障がい者スポーツ指導者への聞き取り）の結果

健常者への指導と障がい者への指導の共通点は表1、健常者への指導と障がい者への指導の相違点は表2の通りである。

全回答のうち、健常者と障がい者へのスポーツ指導上の共通点についての回答量を1とすると、相違点について約2.5倍の回答量があり、全体的に相違点のほうが量的に多くの回答が得られた。

回答内容は、大きく次の3つに分けられた。具体的には「コミュニケーションの重要性」、「対人支援であること」および「運動・スポーツにかかわる知識習得の重要性」であった。一方で、運動やスポーツに関する専門知識に関する回答は、「誰を指導するにしても知識は必要」および「運動に関する知識は常にアップデートする努力をするのは一緒」という指導者の態度に関わるような回答が得られたものの、いわゆる実践的かつ具体的な指導方法に関する回答は得られなかった。

表1. 健常者への指導と障がい者への指導の共通点 (障がい者スポーツ指導者2名より)

分類	主な回答例
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のことを考える。 ・相手に合った声のトーンや大きさにする。 ・表現のバリエーションがあればあるほどよい。 ・名前を覚えると、みんな喜ぶ。
対人支援	<ul style="list-style-type: none"> ・人前に立っている意識はいつも一緒。 ・指導者の姿勢 (立ち姿、目配り等)。 ・変化に気づく力。
運動やスポーツに関する専門知識	<ul style="list-style-type: none"> ・誰を指導するにしても知識は必要。 ・運動に関する知識は常にアップデートする努力をするのは一緒。

表2. 健常者への指導と障がい者への指導の相違点 (障がい者スポーツ指導者2名より)

分類	主な回答例
障がいそのものの知識習得	<ul style="list-style-type: none"> ・障がいについて考える。 ・障がいについて知れば知るほど提供できるものが増えて、サポートの仕方も変わる。 ・障がいゆえの注意点があるか、ないかを知る。
「できること」と「できないこと」の見極めに関わること	<ul style="list-style-type: none"> ・病気を言い訳にしていることも多い。 ・障がい者の「できない」は「甘え？」と思うことも多い。実際にはできるようになって改善に向かうことも多いような気が…。 ・「できないことがある」のを前提にして、「できるようにするには」、「その人ができるようになることは何か」を考えている気がする。
指導のプログラムに関わること	<ul style="list-style-type: none"> ・時間配分の違い (健常者、知的障がい児、高齢者、脊髄損傷では休憩の取り方が違う)。 ・障がい者に指導するときの方が、より「量」の調節に気を遣う。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者への指導の方が「待てる余裕」が必要。 ・相手を想像しにくい。 ・運動・スポーツ施設における「更衣」について⇒「やらない人」「できない人」も多いが、どの程度の指導をするか判断に迷うことも多い。

Ⅲ-2. 調査2 (大学生バドミントン選手の指導者、かつ障がい者バドミントンの指導経験を有する指導者に対する聞き取り調査) の結果

身体障がい者に指導する際に大学生を指導している時と共通していると感じていたことを表3に、身体障がい者に指導する時に大学生を指導するのとは違うと感じていたことに対する回答を表4に示した。

回答内容について量的に検討したところ、「身体障がい者への指導時に、大学生を指導する時と共通していると感じること」と「身体障がい者に指導する時に、大学生を指導するのとは違うと感じること」の回答量の割合は、およそ20%対80%で後者のほうが多かった。つまり、全体的に「身体障がい者に指導するとき、大学生を指導するのとは違うと感じること」のほうが多かった。また回答内容については、「上肢障がい」「下肢障がい」「車いす使用者」などの「障がい別」に分けたケースが多かった。たとえば指導者Cの「障がい別に考えた方が考えやすい」という回答や指導者Dの「○○の障がいの場合、」と前置きして特定の障がいを想定した回答の仕方であった。一方、指導者Dは「全体的に」という枕詞をつけながら特定の障がいを想定しない回答もしており、障がい全般を通した複合的

表3. バドミントンにおいて身体障がい者に指導するときに大学生を指導するのと共通していると感じること（障がい者バドミントンの指導、サポート経験者2名より）

分類	主な回答例
上肢障がい	・戦術的には大学生と同じではないか。
下肢障がい	・「同じところ…」と言って言葉を詰ませたあと、 ・ケガして動けなかったときがあって、うまく球が打てなかったときがあって、そのときに一番良い方法を探した経験があって、そのときの経験がすごくヒントになった。ケガしてできないことが増えたときに、その中でできることを探すという経験をしたことが、障がい者への指導を考えたり、アドバイスしたりしたことが役に立っている気がする。とはいえ、関節が動くので、義足などとは違うのですが。
車いす使用者	・戦術的に高い球で時間をかせぐというのは、健常者とまったく一緒に、「同じだな」と思う部分は、わりとこれまでの経験などからそのまま伝えられる気がする。
障がい種別を問わない全体的なもの	・全体的として、空間をどう使うかという戦術的なことは健常者と基本的には同じなのではないか。 ・全体としてシャトルに届いた部分については共通する部分が多いが、届く前の移動に関しては違いが多く、教えるにくい。

なものとして、全体的な視点を踏まえた発言も見受られた。

各設問別では「身体障がい者への指導時に大学生を指導する時と共通していると感じること」に対しては、スポーツの「戦術」に関することに集約された。また、下肢障がい者に対する指導については回答が得られなかった。

「身体障がい者に指導する時に大学生を指導するのとは違うと感じること」の問いに対しては、上肢障がい者については「サービス」に関する回答が多く得られた。下肢障がい者については、「下半身の踏ん張りが弱いので、体全体を使って打たないので、分かりにくい」や「足が曲がらないという感覚はまったく分からない」という回答に代表されるように、指導者にとって、「体の使い方が分からない（イメージが湧かない）」ことを含意する回答が目立った。また、車いす使用者については、車いすという「道具の特性」と「戦術」に関する回答が主であった。

これら以外の発言で特徴的あるいは示唆的であると判断できたものについて、以下に列挙する。

- ①何度も経験していると、分からないなりに考えられるようになってくる。あくまでも想像だけど、でも、これは「できないんだ」という判断がついてきて、そうすると別の方法を考えて創らなきゃいけないと考えるようになる。
- ②「疑似体験ができると、「何ができないのか」「何が難しいのか」が少し分かる気がして、考える材料を得ることができる。
- ③実際に見ることがとても大きな意味がある気がする。見ても、やっても分からない部分は分からないけど、でも見ないと分からない気がする。
- ④ケガして動けなかったときがあって、うまく球が打てなかったときがあって、そのときに一番良い方法を探した経験があって、そのときの経験がすごくヒントになった。ケガしてできないことが増えたときに、その中でできることを探すという経験をしたことが、障がい者への指導を考えたり、アドバイスしたりしたことが役に立っている気がする。とはいえ、関節が動くので、義足などとは違うのですが。

表4. バドミントンにおいて身体障がい者に指導するときに大学生を指導するのとは違うと感じること (障がい者バドミントンの指導、サポート経験者2名より)

	主な回答例
上肢障がい	<ul style="list-style-type: none"> ・ショートサービスが上手ではないという印象がある。上肢障がいだとシャトルの向きを調節するのが難しいので仕方ないのかなとは思っていますが。
下肢障がい	<ul style="list-style-type: none"> ・一番難しいかな。こういう風に教えてくださいと言われるんだけど、よく分からないというのが…。 ・伸び上がって打っている印象があって、何となく手打ちの印象。 ・下半身の踏ん張りが弱いので、からだ全体を使って打たないので、分かりにくい。 ・足が曲がらないという感覚はまったく分からない。 ・下肢の人とやるときには自分のペースを落として、ラリーのつながりを意識してやっている点は学生を相手しているときとは違う。 ・腕や手の動きについて言うことはできるけど、からだの動き全体については言うことができない。「自分はこんな感覚でやっています」という感じで自分の感覚を伝えている。
車いす使用者	<ul style="list-style-type: none"> ・車いすはルールが違ってネット前を使えないので、正直、難しい。 ・サービスでエースを狙える。サービスをコントロールすることですごく優位になったりするので、影響が大きい。特に車いすの場合、サービスで試合が決まるという感じもあって、それは明らかに違う。 ・連続して強い攻撃をすること。大学生なら苦しくても連続して打ちにいかなければいけないこともあるが、車いすだと車輪がスリップしてすぐに移動できないこともあるので、「連続して攻撃してください」、と簡単にいえないところもある。 ・シャトルに触れる打点が違うので (ヒッティングパートナーをする際には)、車いすではあり得ない高さでは触らないように気をつけている。 ・車いすは転がっちゃって、踏ん張れないので。これは大変だなと。 ・車いすは止めなきゃ、止まらない。バドミントンをしていて利き手の反対の握力が落ちることはないが、車いす選手はある。
障がい種別を問わない全体的なもの	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者はそれぞれの障がいで苦手な動きがあるので、健常者のように個人ごとの弱点の違いではなくて、障がいごとに弱点が共通している。車いすは車いすの弱点、下肢障がいの人は下肢障がいの人の弱点が同じ傾向にある。特に上肢の人が分かりやすい。ラウンドサイドは弱い。 ・障がい者のほうが (プレイ上の) 悪いところが目立つので、ここが弱いよね、ということばかり言うってしまう。その影響もあって、その人の良いところを見つけるのは難しくして…。でも、その弱点は本人が一番よく分かっているだろうから、何をどう教えていけば良いか…難しい。 ・障がいごとに戦術はある程度決まってくるのではないかという気がする。車いすなら、A選手と話しても、B選手と話しても、だいたい同じようなことをやろうとしているし、下肢障がいも同じような傾向がある。

IV. 考察

指導者A・B・C・Dへの聞き取り調査の結果に基づいて、障がい者へのスポーツ指導と健常者への指導の共通点や相違点について検討する。

本研究では適宜、CoteとGilbert⁶⁾が示した「コーチに必要な知識」に関する分類を参照しながら検討を進めることとする。CoteとGilbertはコーチに必要な知識として、次の3つを挙げている。具体的には、①専門的知識、②対他者の知識、③対自己の知識である。専門的知識については「当該スポーツに関する知識やトレーニング、スポーツ指導等に関わる知識」のことをいう。同様に、対他者の知識については「人間関係を円滑にしていくために必要とされる知識」を指し、対自己の知識とは「コーチが成長し続けるためにもっとも重要な知識であり、コーチングの根幹をなすものである」と

して、「自分自身のコーチング実践を客体視しながら振り返る省察行動である」ことが示されている。また、知識には「宣伝的知識」と「手続的知識」があることも示している。宣伝的知識は「言葉で表現できるような知識のこと」を、手続的知識は「何かができる」ことを指し、例として「自転車に乗る知識」が挙げられているとされている。

IV-1. 障がい者へのスポーツ指導と健常者への指導の共通点や相違点の量的な違い

指導上の共通点と相違点では、「相違点」のほうが量的に多くの回答が得られた。このことは、元来、障がい者スポーツを含むアダプテッド・スポーツが「身体に障害がある人などの特徴に合わせてルールや用具を改変、あるいは新たに考案して行なうスポーツ活動」⁷⁾であるとする考え方にに基づいていることを考えれば、相違点に関する回答が多かった結果は十分に予測の範囲であった。

内田⁸⁾は人間がポジティブな考え方よりもネガティブな考え方のほうに強く影響を受けるという特性を持つことを述べているが、このような行動経済学分野のプロスペクト理論を踏まえれば、指導者が障がい者がスポーツ活動へ参加することに対して無意識のうちに指導対象者の「できないこと」や健常者との「違い」を考えていて、そのことに強い影響を受けている可能性があるものと推測された。

指導者Aは、障がい者スポーツ指導者にとって、指導対象となっている障がい者の「できること」と「できないこと」を見極めることの重要性について示唆している（表2）。マートン⁵⁾も障がいのある選手の「できないことではなく、できることに集中する」ことがコーチにとっての重要事項であることを示している。従って、指導者は選手の「できること」を引き出し成長させていくことに注力するためにも、「できること」と「できないこと」両面に目を向けた観察と指導を通して選手の理解に努め、選手のさまざまな局面に向き合いながら指導を展開していくことが求められているのではないだろうか。

IV-2. 「コーチに必要な知識」からみた障がい者スポーツ指導の特性

CoteとGilbert⁶⁾が示した「コーチに必要な知識」に関する分類を参照し障がい者スポーツ指導の特性を検討したところ、多様な障がい者に指導している指導者と特定のスポーツ種目を指導している指導者の回答内容に違いがみられた。

多様な障がい者に対して指導している指導者A・Bの場合、全体的に「コミュニケーション」に関する回答が多く（表1および表2）、「対他者の知識」について関心が高いことがわかった。また、「専門的知識」については「障がいについて考える」、「障がいについて知れば知るほど提供できるものが増えて、サポートの仕方も変わる」、「障がいゆえの注意点があるか、ないかを知る」などの回答に代表されるように、スポーツに関する専門的知識よりも障がいおよび障がい者についての専門的知識に対する関心が高いことがわかる。

一方、バドミントンに特化して障がい者への指導に関わってきた指導者C・Dの場合、回答内容の多くが「専門的知識」の特にスポーツ（本研究の場合、バドミントン）に関するものであった（表3および表4）。指導者C・Dの指導対象の多くが障がい者バドミントンの競技選手であったことが本研究結果に大きな影響を及ぼしたことが推測できるが、健常者が特定のスポーツ種目に特化して障がい者への指導を求められた場合、選手からの要望として「その種目の専門的なことを知りたい」という

潜在的なニーズを感じる場面が多くあり、それに応えようとした結果と見なすこともできるだろう。ところで、下肢障がい者に対する指導では、「分からないことが多い」という回答が多かったが、一方で、『疑似体験ができる』と、「何ができないのか」「何が難しいのか」が少し分かる気がして、考える材料を得ることができる』や「実際に見ることがとても大きな意味がある気がする。見ても、やっても分からない部分は分からないけど、でも見ないと分からない気がする」などのように、何とか障がい者のプレイしている感覚を理解し、「わからない」という閉塞状況を打開しようとしている様子も強く窺えた。これらは「対自己の知識」への意識や関心の高さの現れと理解することができるだろう。

ここではCoteとGilbert⁶⁾の「コーチに必要な知識」に関する分類を通じ、それぞれの指導者が置かれている状況や指導対象者の違いが指導者の持つ意識や関心の違いに結びついていた様相が確認できた。すなわち、多様な障がい者に対し指導する者（例えば障がい者スポーツセンターの指導員）の場合、全体として「対他者の知識」についての意識や関心が非常に高く、また「専門的知識」についてはスポーツに関する専門的知識よりも障がいおよび障がい者について専門的知識に対する意識や関心が高かった。それに対して、バドミントンに特化をして障がい者への指導に関わってきた指導者の場合、特化したスポーツ種目に関する「専門的知識」に対する意識や関心が高く、それに伴った「対自己の知識」についての意識や関心が高かった。

IV-3. インタビューから得られた実践面への示唆

本研究を通じて、「Ⅲ-2. 調査2の結果」に示したようないくつかの発言が確認できた。いずれも障がい者バドミントンの指導やサポートを経験した指導者からの発言内容であった。健常者が自らのスポーツ経験などを活かしながら障がい者への指導を実践しようとするとき、あるいは、これから障がいのある人へのスポーツに関わってみようとする人にとって、大変示唆的であると思われる。

「Ⅲ-2. 調査2の結果」の①および②は、たとえば車いすに乗車したり、車いすに乗車したスポーツを体験することに代表される、いわゆる模擬・疑似体験が障がい者スポーツ指導を考える際の大きな助けになる可能性があることを示している。模擬・疑似体験をした結果、障がい者のことや障がい者のスポーツや運動の感覚を明瞭に理解できるようになる訳ではない。身体そのものが障がい者と同じまたは近似した状態になる訳ではないので当然のことである。しかし、「少し分かる気がして」くることや、「分からないなりに考えられるようになってくる。あくまでも想像だけど、でも、これは『できないんだ』という判断がついて（略）」くることが、健常者が障がい者にスポーツを指導していく上では、とても重要なことなのではないだろうか。

さらに遡って③「実際に見ることがとても大きな意味がある気がする。見ても、やっても分からない部分は分からないけど、でも見ないと分からない気がする」という発言もあった。健常者が自らのスポーツ経験などを活かしながら障がい者への指導を実践しようとするとき、どのようにその入り口に立ったら良いかということに関連して、興味深い示唆があるように思われる。

④では、指導者自身のケガをしたときの感覚やその時の日々の工夫が、障がい者のスポーツ指導に対してとても有益な示唆があったという内容であった。スポーツ経験のある人であれば、大小の違いはあれども、誰もがケガをしたという経験を有するだろう。この④の指摘は今後の障がい者スポーツ

指導者養成を考えていく上での大きな示唆が含まれているようにも思われる。

V. まとめ

本研究ではコーチング学的視点から障がい者スポーツについて検討すること、具体的には指導者へのインタビューを通じて、障がい者へのスポーツ指導と健常者への指導の共通点や相違点について明らかにしようと試みた。主に①障がい者へのスポーツ指導と健常者への指導の共通点や相違点の量的な違い、②「コーチに必要な知識」からみた障がい者スポーツ指導の特性について検討を行い、③インタビューから得られた実践面への示唆を加えた。

1. 障がい者へのスポーツ指導と健常者への指導の共通点と相違点を比較したとき、相違点のほうの回答量は多かった。アダプテッド・スポーツの元々の考え方に従えば、この結果はある程度妥当なものとする解釈が成り立つことが、一方で、人間の特性を考えると、障がい者スポーツに関わる指導者は無意識のうちに指導対象者の「できないこと」やいわゆる健常者との「違い」に強く影響を受けている可能性があることを示唆した。
2. 多様な障がい者に対して指導している指導者の場合、全体として「対他者の知識」についての意識や関心が非常に高く、「専門的知識」についてはスポーツに関する専門的知識よりも障がいおよび障がい者について専門的知識に対する意識や関心が高かった。それに対して、バドミントンに特化をして障がい者への指導に関わってきた指導者の場合、特化したスポーツ種目に関する「専門的知識」に対する意識や関心が高く、それに伴った「対自己の知識」についての意識や関心が高まっている様相が確認できた。

VI. 今後の課題

本研究では障がい者スポーツ指導者に対する聞き取り調査を通じて、いくつかの貴重な示唆を得ることができた。しかし、調査対象者がごく少数である上、調査対象者全員が20代という成熟過程にあることなど、いくつかの点で偏りのある結果になっている懸念は拭えない。

今後、本研究結果の一般性・普遍性を認めることができる部分と個別性の高い部分を明らかにすべく検証作業を継続することがきわめて重要であると認識するところである。

【引用・参考文献等】

- 1) 矢部京之助・草野勝彦・中田英雄、アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～、市村出版、2004。
- 2) 金子元彦、障害者スポーツのコーチングに関する一考察—バドミントンを例にして—、ライフデザイン学研究創刊号、pp147-162、2006。
- 3) 森川洋・金子元彦・和秀俊、障害者スポーツ論、pp104-105、大学図書出版、2014。
- 4) 金子元彦、大学生および障がい者バドミントン選手への指導事例から得たコーチング学的視点、日本コーチング学会第26回学術大会（大阪体育大学）、2015。
- 5) レイナー・マートン（大森俊夫・山田茂訳）、スポーツ・コーチング学—指導理念からフィジカルトレーニ

ングまで一、pp61-62、西村書店、2013.

- 6) Cote and Gilbert, An Integrative Definition of Coaching Effectiveness and Expertise, International Journal of Sports Science and Coaching 3 (1), pp 1-10, 2009.
- 7) (社) 日本体育学会監修、最新スポーツ科学事典、平凡社、2006.
- 8) 内田和俊、レジリエンス入門—折れない心のつくり方—、pp69-79、ちくまプリマー新書、2016.

【付記】

本研究は平成27年11月に開催された日本ヘルスプロモーション学会第13回大会（新潟）における発表内容に追加調査を実施して、大幅に加筆修正したものである。

【謝辞】

本研究は平成27年度東洋大学国内特別研究によって遂行した研究の一部である。
貴重な研究機会をいただきましたことを深くお礼申し上げます。

The Study of Coaching relating to the instruction of disabled players in sports
—thorough the interview with coaches—

KANEKO Motohiko, MORIKAWA Hiroshi, SUITA Masashi

The purpose of this study was to examine the instruction in sports for people with a disability from the viewpoint of a coaching study. It clarified similarities and a differences between the instruction of people with a disability and non-disabled people, through interview with coaches. This paper examined the three following topics. 1. The quantitative difference between similarities and differences in the instruction of individuals with disabilities compared to instruction of non-disabled people. 2. Examining the characteristics of sports instruction for disabled individuals from the view of “knowledge necessary for a coach” 3. Showing suggestions for practical coaching discovered through interviews. The following are the results: 1. When comparing similarities and differences, the quantity of answers for differences outweighed answers for similarities. As for coaches in sports for people with a disability, there was a tendency to focus on what the players were “unable to do”. 2. In the case of coaches for various people with a disability, as a whole, “the knowledge of others” was highly concerned. In addition, about “the knowledge of expertise”, the knowledge of an obstacle and the people with a disability were more highly concerned than the knowledge of sport. 3. It was suggested that the knowledge that coaches got from similar experiences on the sport for disability and through experiences of the injury helped coaching.